令和5年度「生活者としての外国人」のための特定の二一ズに対応した日本語教育事業 【地域日本語教育実践プログラム】

実施内容報告書

団体名:特定非営利活動法人フィリピノナガイサ

1. 事業の概要

事業名称 日本語教育活動

に関する特定の ニーズの実情や

課題

BAYANIHAN~みんなで地域をつくっていこう~

1. 浜松市におけるフィリピンをはじめとする在住外国人の人口状況(資料協力: 浜松市) 2023 年1月1日現在、浜松市の外国人住民数は 26,748 人である。そのうちフィリピン人は 4,164 人と、ブラジル人に次いで多く在住している。現在は新型コロナウィルス感染状況が徐々に緩和し、コロナ以前のように微増し続けている。そして、本地域のフィリピン人について特筆すべきことは、地位等類型資格者が全体の約 89%を占めており、主として家族の絆で定着している人が多いことである。その他、浜松市の在住外国人状況の特色としては、84 か国もの国と地域の人々が暮らしていることである。先述のフィリピン人同様、外国人人口全体で見ても地位等類型資格者が多い上、さらに近年は「特定技能」「家族滞在」といった在留資格者についても増加が顕著である。このような背景から今後、地域社会の一員として取り込む「生活者としての外国人」とは、幅広い国と地域、在留資格の人々を捉えていく必要がある。

2. フィリピンをはじめとする在住外国人の属性ごとの課題

当法人を訪ねてくるフィリピン人については、同じ国にルーツを持ちながら来日の時期・ 事情の分散と複数の環境要件を併せ持っている。まず、これらフィリピン人の中でも比較 的よく見られる属性ごとのニーズとレディネスなどについて順を追って記す。

日本生まれ日本育ちの若い世代(学齢期)

日本で生まれた後、フィリピン人コミュニティ内で幼少期を過ごすため、小学校 1 年生の日本語の壁で苦労する。そこで躓くと学習言語の習得に苦労することになる。

学齢期を超えて来日する若い世代 (学齢期超)

学齢期を超えて来日した 10 代の子どもたちの中には、その来日理由が本人たちによるものではないことがある。来日当初、彼らは「SNS やゲームの中に留まり、実体験として日本社会との接点が希薄」といったことも珍しくない。この子どもたちの中で高校へ進学するのはごく一部であり、多くは乏しい日本語力と知識、体験しか持たず働いているが、定住する傾向は強い。このような若年層の来日は今も続いている。

そして、かつて来日した子供たちについては滞在年数が経過し、今では日本社会を支える年代(20代~30代前半)に差し掛かっている者もたくさんいる。20代を超えた彼らは、日本社会から一定の日本語レベルを求められている。具体的には、「会社からN2(あるいは本人の現状のレベルからまずはN3)を取るように言われたから、日本語を教えてほしい」「出産するから、関連書類の読み書きを支援してほしい」等、様々である。このような問い合わせで当法人を訪ねてくる若者は市内に留まらず西は豊橋市、東は御前崎市辺りからもある。こうした繋がりは団体の長い歴史の中で、「いつでもおいで」「たまに近況聞かせて」という教室文化が継承、醸成され、確立されたことによるものだと考える。

こうした来日直後の若年層を取り込むような場づくりは、その後の彼らのライフステージに寄り添い続けることにもつながってきた。そのため当法人は現在、「若年層が日本社会を支える一員として通用するような、自律学習や学び直しを促進する」という新たな役目も担っている。

滞在年数の長い中高年、とくに女性が多い

1990年代、興行の在留資格で来日し、夜間、飲食店に勤めた女性たちは現在、中高年に差し掛かっていること、またコロナ禍で仕事が安定しないことから転職を考える人も出ている。この人たちは読み書きへの苦手意識は強いが、経験から推測する力と「聞くこと」「やり取り」には長けていることが多いため、日常的なことであれば方略的 Can Do で「なんとかなっている」という状況にある。しかし、自己実現を目指そうと転職を考えたとき、高度な日本語力を要する労働契約、社会保障といった内容の理解が難しく、障壁となっていることもある。彼女たちに希望職種を尋ねると、「英語の先生」「通訳」「ホテルのフロント」「スマホ販売」などがあるのだが、いずれも「接客での経験を活かしたい」という思いが根底にはあるようだ。このことから、「日本語教育の参照枠(報告)(文化審議会国語分科会 令和3年10月12日)」にも示されている「生活 Can Do」の5つの言語活動のうち、彼女たちが自然習得した「やり取り」「聞くこと」を生活場面ごとに相応しいスタイルに整理したり、日本での就職活動においては切り離せない「文字」の扱いについても要望に応えたりするということが、地域の日本語教室の新しい役目となっている。

私たちのような地域日本語教室の場に日本語教育の専門家が常駐して、日本語教育の参照枠を活用した教室を運営・実施することは、その教室を起点として例えば後にハローワークや技術専門校、一般財団法人日本国際協力センター(JICE)が実施している就労に関する各訓練や日本語教室に橋渡しすることが可能である。実際、近年はそのように当法人と上述の機関の間で学習者が往来する事例が、複数生まれている。こうした連携が、今後も彼女たちの就職の幅を広げることに寄与していくと良い。

日系フィリピン人の存在

浜松市は現在7つの区があるが、冒頭述べた約 4,100 人のフィリピン人のうち、実に 1,055 人は浜北区在住で、多くは一戸建てを構え、永住の意思がある。さらに詳しく分析 すると、彼らのほとんどが親族関係にあることにも驚かされる。一族の中では世代が進み、日本の高校へ進学、卒業した者が一家の通訳的な役目を担っていることもしばしばである。この子どもたちの多くは、当法人が週末に主催する学習支援・日本語教室へ通い、結果、高校へ進学したという経過をたどっている。加えて進学後は後輩のために、同教室でボランティアとして活躍する事例が継承されつつある。また、別の一家は週末にこの教室に参加することを楽しみにしており、家族総出で日本語を学びに来る姿は珍しいことではない。そのような様子から、浜北区を生活の地盤としながらも、週末は浜松の街なか(中区)で実施されるこの教室活動に参加することが彼らの励みになっていることがよくわかる。そして、それ自体が新しいコミュニティへと年々進化している。ここに参加している浜北区在住者がキーパーソンとなって、同地区に戻って還元するということも考えられるので、例年設置していた浜北区の教室を今年度はあえて中区に集約し、そちらに来ている浜北在住のフィリピン人を核にしたコミュニティ形成を見守ることにする。

さて、ここまでフィリピン人の背景を見てきたがこの章の最後に、その他、フィリピン

人以外の国籍者、地位等類型資格者以外の人たちついても記す。当法人は、これまで主に地位等類型資格者のフィリピン人に対して行ってきた日本語指導、生活相談等の経験を、現在はそのまま活動類型資格者やフィリピン人以外の人々にも移行して対応の幅を広げている。対象者の広がりは、行政と連携して実施する事業(「離転職者向け『公共職業訓練』静岡県立浜松技術専門校委託『定住外国人向け訓練』」、「浜松市体制づくり推進事業」)の受託によるものである。令和4年度の実績としてはペルー、ボリビア、メキシコ、スペイン、パキスタン、ナイジェリア、インドネシアの人たちの在籍があった。在住歴の長い地位等類型資格のフィリピン人のうち、知見、素養を生かした人も現れており、そのような人たちが多様な国籍、在留資格者の人たちの支援にあたっている。このように、先の移住者が後からやってくる移住者の支援にあたるような場が、新たなコミュニティの誕生に発展しつつある。

3相談窓口と情報提供の重要性について

浜松市は南北に長い地形で面積が広いが、当法人は市内でも珍しい、フィリピン人に特化した相談に応じているとあって先述した人々が市内各地から訪ねてくることが多い。また、政令指定都市という規模と、市中心部へのアクセスの良さがあり、近隣市からも当法人を頼りにやって来る人がいる。しかし、訪問理由は他にもある。それは、彼らが気軽に相談できる場を、自治体が運営する相談窓口よりも地域の日本語教室に求めているということである。また、最近はフィリピン人の相談に応じる全国の自治体、相談窓口の担当者、支援者からの相談も頻発しており、令和4年度はそのような対応に追われ続けた。この状況を分析すると、「生活者としての外国人」が日本社会の中に、それぞれに適した形態で集まって頼りにできる場所が少ないということが考えられる。

なお、団体への相談は多岐にわたるが、顕著なのは子どもの呼び寄せに関するものだ。この特定の相談に応じるためには母国の教育事情の把握と呼び寄せ後の子供の教育支援に具体性を持って関わる必要があるが、自治体の相談窓口や行政書士では一時的な支援に過ぎず、対応しきれていない現状がある。一見すると「呼び寄せ、来日に関する相談」であるが、私たちはこれを「教育相談」と捉えているため、相談者のライフキャリアに継続して関わることができている。このような繋がりから折々に触れて生活に必要な情報提供をしたり、対象者別の日本語教育をはじめとする支援事業を受託したりと、活動の枝葉を広げている。

4. 長年における本事業での経験値と特色を生かした地域日本語教育人材の育成と展開

ここまで述べたように、当法人は居場所としての機能がハブになり、団体の価値に結びついてきた。その一連の流れの中に日本語教室を組み込み、設置・運営してきたという背景がある。このような団体の価値は、「日本語教育の参照枠」の言語教育観の3つの柱(「1,日本語学習者を社会的存在として捉える」「2,言語を使ってできることに注目する」「3,多様な日本語使用を尊重する」)とも親和性が高いと考える。ここでは、当法人が令和4年度の本事業の中で展開した、地域日本語教育人材の育成について、事例を2つ挙げる。一つ目は講座についてである。「地域日本語教室はコミュニティの基盤づくり」という標語を掲げて「ラポール」について取り上げ、検討した。養成段階で学んだ理論のうち、地域日本語教育の現場に馴染むものを、本研修ではワークに盛り込むことで参加者に学びと気づきを促すことを目標にした。令和5年度も4年度と同様の標語を掲げ、「動機付け」

に焦点を当てたいと考えている。日本語教育の参照枠の熟達度 B レベルには「自立した言語使用者」とあるが、日本語教師という専門性を活かして自立に導くというのはどういうことなのかを考え、全国に先駆けた実践、提案をしていきたい。

二つ目は「言語を覚える難しさを体験しよう」という標語を掲げて実施した「フィリピノ語スピーチコンテスト」についてである。この取組はコンテスタント(日本人)が通訳士(当法人のフィリピン人スタッフ)と組み、オンライン上で複数回スピーチの練習をした上でコンテストに出場する。その練習の過程においては、衝突も少なからずある。しかし、終わってみると日本語に限らない、「言語を使う意味」「言語を覚える体験そのものの難しさ」などを、全員でかみしめるといった実体験からの学びがあった。コンテストは浜松市最大級の国際交流イベントである「はままつグローバルフェア」(主催:HICE)と連携して実施したが、一般の聴衆にもこのようなコンテスタントと通訳士の一連のドキュメンタリーを垣間見せることで、多文化共生社会への理解や気づきを促進するという波及効果を狙った。なお、コンテスタントは県外の大学生、自治体職員、起業家などバラエティに富んでいた。

令和5年度はこれらの取組をより充実・発展させ、引き続きハイブリッド開催とし、浜 松市内外の地域日本語教育の底上げをしていくつもりである。そのためには、人材育成に 当たる人材もまた、研鑽の必要がある。その研鑽の連鎖が末端の教室文化形成へと繋がっ ていくことを考えれば、人材育成に携わる者も複数名でチームを組みリフレクションしな がら、講座を組む必要を感じている。私たちは学習者にどのように向き合うかはもとより、 指導者自身が社会とどのように向き合うか、あるいは学習者と社会をどのように結びつ け、自身はどのように関わるか、関わるすべての人たちの人生を豊かにすることを常に考 え、カリキュラムにしたり活動に結び付けたりすることができるかどうか、そのような大 変高度で込み入った領域まで踏み込んだ日本語教育人材の育成、継承を目標に据えて事業 展開するつもりである。

5. 時代に即した団体のあり方

当法人がこの事業を受託して 10 年以上の歳月が経った。近年、国策として、外国人受け入れ状況は激動の時代に突入したが、だからこそ、我々は活動を通して様々な関わりが「定住外国人向け」といった動きに変わってきていることを実感している。これまでは外国人の自助努力団体として身分系資格者の声を拾い上げることを得意としてきたが、今後は在留資格の枠を超えて、また、日本人と外国人という垣根も超えて、問題点や困りごとが社会に埋没されないよう、見とり、見きわめ、見立てて、寄り添うよう、実践していかなければならないと考えている。

事業の目的

定住フィリピン人をはじめとする「生活者としての外国人」がコミュニティ内に埋没 するのを防ぐこと

- ・様々な背景を持つ「生活者としての外国人」の、「広い窓口」として機能すること
- ・先の移住者が、後から来日した移住者の先行モデルとなり支援すること
- ・多文化共生社会実現への理解、継承のため、若年層を取組の補助者として積極的に取 り込むこと
- ・多文化共生社会実現への理解、普及のため、地域日本語教育人材の育成に励むこと
- ・行政・教育機関をはじめとする日本社会と接点を持ち、「生活者としての外国人」を

日本語教育に関連づけること

事業内容の概要 (課題をどのようにが 、どのようなの はが先進的な取 組であったのか 分かるように記

載)

定住外国人コミュニティに埋没してしまわないよう、当該地域の生活者としての外国人が参加・利用しやすく、ライフステージに応じた支援の機能を持つ日本語教室を実施することを目的に、以下の取組を行った。

取組1「バヤニハン運営委員会」

本事業の総括として設置、運営した。

取組2「パヤニハン日本語教室(中区クラス・オンラインクラス)」

① 中区クラス

- ・初回にインテーク面談と学習アンケートを実施することで学習目標の意識付けに努めた
- ・言語を使ってできることに注目し、参加者それぞれのライフステージで求められる日本 語での課題を遂行できるようにした。
- ・先の移住者(主婦、大学生、高校生など)をスタッフやサポーターとして登用し、自身 の経験を伝えられる場としての機能を持たせた。

② オンラインクラス

- ・対面での教室参加が難しい学習者や教室から足が遠のいてしまった学習者に対して、オンラインにて日本語学習の進捗状況の確認や日本語学習のアドバイスを実施した。
- ・オンラインクラスから実際に対面での教室参加を希望する学習者が増えたため、若者の ニーズに特化した教室の設置を検討し、実施した。

取組3「バヤニハン公開講座」

・取組4の成果発表を、浜松市の国際交流イベント「はままつグローバルフェア」と連携 して実施した。また、取組2の発表として、パネル展示も実施した。

取組4「バヤニハン人材育成講座」

① 日本語教育に関わる人材の養成・研修

地域の実情に沿った課題解決ができる日本語教師の育成を目指した。また、ワークショップでは「動機付け」をテーマにフィリピノナガイサの事例を紹介し、「人が集まる」、「学習が続く」ために必要な取組について議論し、理解を深めた。

② フィリピノ語スピーチコンテスト

フィリピン人と日本人がペアになり、フィリピノ語でのスピーチを作るワークショップ。 両者がペアになり、一つのもの(スピーチ内容)を作っていく過程で、日本語教育参照枠 の3つの言語教育観への理解を深めた。

取組5「バヤニハンワンストップ相談&情報提供」

- ・生活者としての外国人から日々の生活や日本語学習についての相談に対応することと地域の生活で役にたつ情報の提供を実施した。
- ・相談内容によっては、関係機関への橋渡しを実施。
- ・生活者としての外国人の困りごとの中には、日本語がわからないから困っているものも 多く存在するため、「相談対応→日本語学習の提案」を合わせて実施した。

事業の実施期間

│令和5年5月 ~ 令和6年3月 (11か月間)

2. 事業の実施体制

(1) 運営等委員会

実施体制 構成員の人数:10名

構成員の主な属性や専門性:

公的機関:静岡県経済産業部、浜松市国際課、浜松市教育委員会

社会保障に関する内容:弁護士、行政書士

• 日本語教育や教師教育の知見: 大学教授

若者の発達に関する内容:臨床心理士

運営方法:

実施期間中、全3回にわたり委員会を執り行った。

1回目:事務局から事業趣旨を説明しそれを受けて委員よりご意見、助言をいただいた。

2回目: 進捗報告、改善点に対する意見交換を行い、助言をいただいた。

3回目:事務局より令和5年度の報告をし、まとめとして評価をいただいた。次年度以降

の事業継続の可能性を見据えて、議論した。

(2)地域における関係機関・団体等との連携・協力

連携体制

【取組1】運営委員会

地域連携の観点と当法人が把握している諸課題から委員を構成した。フィリピンをはじめとする「生活者としての外国人」に関わりある公的機関(静岡県経済産業部…就労/ 浜松市国際課…生活全般・共生社会/浜松市教育委員会…教育)、そして社会保障の立場から士業の先生方(弁護士、行政書士)、日本語教育の知見から大学教授、若者の発達に関するご助言として臨床心理士、各方面の専門家からご意見・評価を賜った。

【取組2】バヤニハン日本語教室(中区クラス・オンラインクラス)

地元住民や、かつて当法人で日本語学習者として通っていた若者、地域の大学生に、日本語支援としての教室補助(サポーター)の協力をお願いした。

【取組3】バヤニハン公開講座

「フィリピノ語スピーチコンテスト」は、浜松市最大級の国際交流イベント「グローバルフェア」において実施することで、参加者への周知・動員を図った。ハイブリッド開催としたことで、オンラインでの参加を呼びかけるため、フィリピノ語専攻課程のある大学との連携(静岡県立大学、大阪大学、東京外国語大学)や各関係団体((一財)自治体国際化協会(市民国際プラザ)、近隣の国際交流協会)などに周知を依頼した。なお、フィリピノ語スピーチコンテストは共催・浜松市、後援には(公財)浜松国際交流協会(HICE)ほか、浜松市教育委員会にもお願いした。

【取組4】バヤニハン人材育成講座

浜松市は、市民活動を大切にする土壌をもっている。当法人も例外ではなく、浜松市との連携により活動の実績を築いてきた。このような事例を全国の自治体や市民団体に普及した。また、日本語教育人材が自己理解と職業理解を深め、一層の専門性について考えられるような講義を実施した。本取組は共催:浜松市、後援:(公財)浜松国際交流協会にお願いした。

【取組5】バヤニハンワンストップ相談&情報提供

ワンストップ相談では、相談内容によって行政機関(浜松市、浜松市教育委員会、静岡 県教育委員会)や士業(弁護士、行政書士)と連携し、対応した。情報提供では、各回の テーマに合った関連企業や団体に参加してもらい、実施した。

(3) 中核メンバー及び関係機関・団体による本事業の実施体制

実施体制

松本義一

…全取組の整合性を図りながら、内部と外部(文化庁、行政、地域の関係機関や住民、本事業担当者ら)とを調整し、地域連携の促進に努めた。円滑な事業遂行のため、全体の指揮を執った。

山浦優子

…主に取組3のコーディネートにあたった。

有田玲子

…主に取組4のコーディネートにあたった。

3. 各取組の報告

A PLANTA IN M						
運営等委員	会の設置					
【名称:バ	ヤニハン運営委	秦員会】				
取組の目標		定住フィリピン人をはじめとする外国人が、コミュニティ内に埋没するのを防				
		ぐために、各取組の成果に対する指導・助言を行う委員会を組織し、本事業を				
		総括する。				
内容		地域連携の観点と、当法人が把握している諸課題の解決から委員を選出し、組				
		織する。				
		公的機関:静岡県経済産業部、浜松市国際課、浜松市教育委員会				
		・社会保障に関する内容:弁護士、行政書士				
		・日本語教育や教師教育の知見:大学教授				
		・若者の発達に関する内容:臨床心理士				
本取組によ	り検討された	・ライフステージに応じた支援の一つの手段として、日本語教育は必要不可欠				
事業の方針	や特定のニー	である。また、その窓口の機能を担う地域日本語教室の果たす役割は大きい。				
ズに対応し	た日本語教育	・ライフステージに応じた支援の精度を上げていくためには、参加者への聞き				
の方向性		取り調査(インタビュー形式)を実施するべき。それを参考に教室での取り組				
		み内容の精度も上げていく必要がある。				
実施期間	令和5年6月	18日 から 開催時間・回数 1日 0日 0日 0日				

特定のニーズに応じた日本語教育の実施

令和6年3月12日 まで

【名称:バヤニハン日本語教室(①中区クラス ②オンラインクラス】

取組の目標	・取組5「バヤニハンワンストップ相談&情報提供」と組み合わせる。当法人に
	寄せられる相談の中には、少しでも日本語を使うことで日本社会の枠組に元来
	ある相談窓口に橋渡しできる案件も含むことから、相談者に日本語学習の機会
	を提供していく(取組2と取組5を同日、同時刻に開催する)。
	・主に若者に対して、オンラインを用いて日本語学習の機会提供を拡充する(来
	日して年数が経過し、対面で行う教室開催日時と都合が合わない者や、かつて

1回 2時間 × 3回 = 6時間

浜松に暮らしていたが近隣の市区町村へ転居した者も多いため)。若者との継

	T				
	続的な関わりを通して、自立した言語話者として育成する。				
	・取組4「バヤニハン人材育成」の受講者が、いずれかの教室に関わることを目				
	指す。				
内容	【中区クラス】				
	・支援者に協力]を仰ぎ、学習者の [.]	個別学習に寄り添っていただくとともに、折		
	に触れて事務局	から下記の学習内:	容を提案したり、提供したりした。		
	・個々の学習者に求められる課題を遂行できるよう、学習目標ごとにグループ				
	を設置した。				
	・日本人、フィ	リピン人の地域住	民、大学生や高校生を支援者に据えること		
	で、国籍や年齢	の垣根を超えた支	援体制を整えた。		
	・学習者の「動	機」を促すことを	目的に、地域の情報に関する内容(取組5の		
	│ │情報提供)をト	・ピックとして、グ	ループでの学習に繋げた。		
	【オンラインク	'ラス 】			
	・対面の教室ス	ケジュールに合わ	ない若者の日本語学習の「機会提供」「きっ		
	かけづくり」「	「動機付け」として	、オンラインで日本語教室を実施した。		
	・若者の多様な	ニーズに応じるこ	とができるよう、若者支援の経験者や浜松市		
	教育委員会関係者、フィリピンにルーツを持つ若者を指導者に据えた				
	・オンラインクラスへの参加をきっかけに対面での教室参加を希望する学習者				
	が増えたため、オンラインと対面の二つの方法で教室を実施した。				
	・対面クラスでは、若者たちの学習ニーズごとに分かれて授業を実施した。				
取組による特定のニー	ライフステージに応じた支援の際に生じる多様なニーズを取りこぼさないため				
ズに対する工夫	以下の点を工夫した。				
	・教室参加の初回にインテーク面談と学習ニーズのアンケート実施。				
	・ニーズごとにグループに分かれて教室を実施。				
	・指導者としてフィリピンにルーツを持つ第二世代の若者や先住者を据えるこ				
	とで、彼らの経験を伝えられるように工夫した。				
	・教室参加後も学習が続くよう、教室コーディネーターが日本語学習の続け方				
	について関係団体を案内することや自律学習の提案などを行った。				
実施期間 令和5年6月	ューロック 3日 から	授業時間	①中区クラス		
令和6年3月	16日 まで	・コマ数	〇		
			 ②オンラインクラス		
			│ │1回 1時間 × 18回 = 18時間		
対象者おもに日本語を	 を学びたい定住	参加者	延べ総数682人		
フィリピン人	(ただし、在留		 (受講者533人、指導者・支援者等149人)		
資格、国籍を制	制限はしていな		一内訳—		
(V)			 中区 479人(受講者418人、指導・支援者91人)		
9 /					

日本語教	「日本語教育の参照枠」から下記、言語活動別の熟達度で示す									
育の言語	・聞くこと→A2									
技能とレ	・読むこと→A2									
ベルにつ	・話すこと(やり取り)→B1									
いて	・話すこと(発表)→A2									
	・書くこと-	→A2								
日本語教	【十八绐】「	丁净库生	! 今に昔こす	,「π存民力	. 冲 / P 。 乡	# 	m 沿弗汗動	た行う!	「Vスタケ	
育の対象	【大分類】「					_				
とする生	を行う」「VI		ATV C W.W.A	ly@] ıMπţ	「云の一戸	₹ ८ 份の] !!	14日夕で豆	いにもの」	「A.1月羊以?	<u>*</u> 4X
活上の行	集・発信する	J								
為につい	【中分類】「	01健康を	·保つ」「025	安全を守る」	「03住月	号を確保する.	」「06お金	を管理する	5」「09家原	産及び
τ	地域で子育て	する」「	10子供に教育	育を受けさせ	±る」「1	1仕事を探す	」「13仕事	に役立つ能	と力を高める	5]
	「14他者との	関係を円	滑にする」	「15地域・社	t会のルー	-ル・マナー	を守る」「	17社会制度	を利用する	5]
	「18人生設計	をする」	「19学習する	る」「「20á	除暇を楽し	ンむ」「21通 ^ん	信する」			
	【小分類】「	(1) 医射	療機関で治療	を受ける」	「(2)	を利用する	」「(3)健康	東に気を付	ける」「((4) 事
	故に備え、対	応する」	「(5) 災害	に備え、対	応する」	「(6) 住居	を確保する	」Γ(9)	金融機関を	利用す
	る」「 (15)	出産に備	iえる」「(1	6) 出産し育	育児する」	「(17)家)	庭で子供を	育てる」	「(19)幼科	推園•
	保育所で教育	・保育を	·受けさせる ₋	Г (20) /	・中・高	高等学校で教	育を受けさ	せる」「	(21) 特別3	支援学
	保育所で教育・保育を受けさせる」「(20)小・中・高等学校で教育を受けさせる」「(21)特別支援学 校で教育を受けさせる」「(22)就職活動をする」「(23)労働条件について理解する」「(28)職業能									
	カ開発を行う」「(29)事務機器等を利用する」「(30)職場の人間関係を円滑にする」「(31)人と付									
	き合う」「(32)異文化を理解する」「(33)住民としての手続きをする」「(34)住民としてのマナー									
	を守る」「(36)福祉等のサービスを利用する」「(37)社会保険を利用する」「(38)生活設計をす									
	る」「(39) 学習する」「(40) 学習を管理する」「(41) 学習方法を身に付ける」「(42) 日本語学習									
	をする」「(43)日本について理解する」「(44)余暇を楽しむ」「(46)インターネットを利用する」									
	「(47)電話・ファクシミリを利用する」									
使用した	文化庁日本語学習動画サイト「つながるひろがるにほんごでのくらし」									
教材・リ	浜松国際交流協会「ひらがな・カタカナれんしゅうちょう」「漢字練習帳」									
ソース	オリジナル教材(当法人が作成したもの 例. ひらがな・カタカナ並べ替え)									
	静岡県「避難	誰生活」	ガイドブッ	ク			_			
受講者の	田	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパー	タイ	インド	ペルー	フィリ	日本
出身(ル					ル		ネシア		ピン	
ーツ)・国				2人					72人	
別内訳	パキスタン1人									
(人)										

(1) 特徴的な活動風景(2~3回分)

取組事例①

【令和5年10月28日】中区クラス

テーマ: おいしく食べて健康に

参加人数:22人

ゲスト: 浜松市健康づくり課 山田さん(管理栄養士) 内容: 主食、主菜、副菜とは、それぞれどんなものか

主食、主菜、副菜を組み合わせることで、体に必要なバランスの良い栄養を取れる

健康のための簡単な+1メニュー 乳製品、果物

料理カードを使って、栄養バランスのいい献立を考えてみる

成果:

・講話の後に献立を考えるワークを行ったことで、栄養バランスのいい食事のために主食、主菜、副菜 が必要というポイントが明確に伝わった。

- ・ワークをしながら「普段は米飯と肉料理一品ということがよくある」とか「野菜が嫌いであまり食べない」等、自身の食生活を振り返る会話が見られた。
- ・普段忙しい生活の中で栄養バランスの良い食事をとるための時短アイデアや、総菜や弁当を購入するときに気を付けることを、ゲスト講師の管理栄養士から聞くことができた。
- ・「食」という身近なテーマを通し、知らない料理や材料の名前を自主的に楽しんで調べる姿が見られた。

改善点:

・後日、運営委員会で公衆衛生はよりよく生きるための基本的な概念で、公衆衛生に関する認識の違いは、多文化共生社会の中で大きな軋轢や差を生じさせかねない重要なテーマだという指摘があった。食というテーマは身近で多くの人が楽しめるテーマであるが、一方で文化や習慣によって常識や当たり前が大きく違うかもしれない。生活習慣病や病気の予防、年齢に応じた栄養バランスなど、生活者に必要な情報がもっと広く届けられるのではと感じた。





取組事例②

【第9回 令和6年12月28日】オンラインクラス

9月に実施した2回のオンラインクラスでは、近況と日本語学習について若者たちに聞き取り調査を実施した。進路について悩んでいるものが多く、久しぶりにオンラインで繋がることで、また教室に顔を出したいという要望が多く聞こえた。その要望に応えるべく、急遽、11月以降に対面でのクラスも展開することとなった。第9回のクラス(写真左)では、zoomを使用して、最近教室に顔を見せていない学習者に対して、近況を聞く取り組みを実施した。日頃使用する機会のない日本語を使用して、簡単な会話を行う練習を行なった。練習には、「つながるひろがるにほんごでのくらし」を利用し、「便利なフレーズ」や「シーン1」の内容を学んだ。対面型のクラス(写真右)では、多くの若者が集まった。日本での生活をする上で、日本語学習の必要性を感じており、まずは浜松国際交流協会が作成した「ひらがな・カタカナれんしゅうちょう」

を使って、勉強した。このように、学べる場・集まれる場を設置し、進路について話し合う雰囲気ができたことで、次のステップに進めた者が多い。ある学習者に対しては、本人が就職を希望していたため、ハローワークが実施する職業訓練を紹介した。職業訓練を受講するためには一定の日本語力が求められることから、それを満たすことを目標とし、新たな日本語学習の動機づけを行うことができた。





(2) 目標の達成状況・成果(取組による特定のニーズの充足)

【中区クラス】

このクラスは日本語教室でありながら、同胞と過ごせる場としての機能も持っている。昨年度から引き続き、インテーク面談(初回面談)や情報提供の重要性と、日本語学習機会の提供が補完関係になるような運営に努めた。具体的には、取組5のワンストップ相談を同日・同会場で実施したことにより、相談窓口としての機能(コーディネーターが専任者としてあたる)と、個別学習のための複数グループ(地域住民や、フィリピンにルーツを持つ高校生・大学生を支援者として)を併せ持つ形式で実施することができた。これにより、インテーク面談(初回面談)から日本語学習のグループに移行し、毎週、中区クラスに通うようになった者もいれば、それぞれのグループにおいて、日本語学習の合間に支援者や仲間に生活上の悩みや相談を気軽に打ち明けられることを励みにして通う者もいた。彼らのライフ・キャリアに継続して関わったことが、日本語教室の機会拡充に至った。

なお、支援者には高校生以上のフィリピンにルーツを持つ若者を中心に起用した。「私はこの支援者に付いてほしい」という、若い彼らにそれぞれのファンが付くような形で、学習者が頼る姿が多く見られた。日本人支援者については、この教室の担当をきっかけにして、当法人のそれ以外の活動、とりわけ国際交流活動にも足を運んでいただいた。このことは学習者との関係性づくりに大いに寄与していただいたものと考える。

【オンラインクラス】

対面の教室スケジュールに合わない若者の日本語学習の「機会提供」「きっかけづくり」「動機付け」を目的としていたが、想定していた以上にオンラインでの声掛けが若者たちの日本語学習の機会提供に結びついた。その結果、対面でのクラスも設置するに至った。また、途中から教室に通わなくなってしまう若者に対する声掛け手段としても、オンラインでの近況確認をすることで、若者にとって敷居が低く感じられたためか、気軽に応じてくれることが多かった。このような成果を上げた理由としては、若者支援の経験者やバイリンガル指導者(浜松市教育委員会関係者、フィリピンにルーツを持つ第二世代の若者)を指導者に据えたことが大きい。バイリンガル指導者が自身の来日後の経験を踏まえて、若者たちへ進路の助言や日本語学習の必要性などを伝えてくれたことが大きな成果を生んだ。

(3) 今後の改善点について

- ・生活相談に支援が偏り過ぎると日本語教育として認められ難いという事業評価を受けることもあるが、彼らにしてみると日本語学習の機会を獲得することそのものが相談だと捉えることもできる。しかし、それは学習者本人の中で潜在的であり、自覚されていないこともしばしばであることから、いかにしてこの点に寄り添うかが、コーディネーター・教師の資質に求められる。
- ・オンラインで若者に声掛けを行うことで、教室への参加や日本語学習の促進に効果を上げることができた。 これは、若者の進路や学習状況を第三者がモニターし助言を与えることで、学習者が自身の進路や日本語学習 の目的・目標を意識化することができたためであると考えられる。今後の取組の中では、指導者が学習者のモニターとしての役割を担うことができるよう、オンラインでの取組を積極的に取り入れていきたい。

取組の成果の発信

【名称:バヤニハン公開講座】

取組の目標

取組4における2つの成果発表を、浜松市最大級の国際交流イベント「はままつグローバルフェア」で行う。

【日本語教育に関わる人材の養成・研修】

・取組4の成果発表を通じて、地域日本語教育を担う新しい人材を獲得する ため、周知を図る。

【フィリピノ語スピーチコンテスト】

- ・参加者に「言語を覚える難しさ」を体験してもらう。
- ・フィリピンの言語・文化等について知ってもらう機会とする。
- ・フィリピン人をはじめとする「生活者としての外国人」と日本人の交流を 促す。
- ・またはその取組の発信を通じて、日本語教育参照枠の3つの言語教育観の柱の一つでもある「多様な日本語使用を尊重する」風土の醸成を目標とする。

内容

下記の成果発表を浜松市最大級の国際交流イベント「はままつグローバルフェア」内で実施した。

【日本語教育に関わる人材の養成・研修】のパネル展示

取組4の人材育成講座の内容をパネルにし会場内に展示した。また、人材育成講座の取組について、ワークショップ講師と受講生にインタビューを実施した。一般の聴衆に地域日本語教室に関心を持ってもらえるよう地域日本語教室の担う役割について発表した。

【フィリピノ語スピーチコンテスト】開催

(共催:浜松市/後援:(公財)浜松国際交流協会・浜松市教育委員会) 言語を学ぶ難しさを体感し、「生活者としての外国人」の気持ちに寄り添っていただく土壌を作った。コンテスタント(日本人)が通訳士(当法人のフィリピン人スタッフ)と組み、オンライン上で複数回スピーチの練習をした上でコンテストに出場した。一般の聴衆にもこのようなコンテスタントと通訳士の一連のドキュメンタリーを垣間見せることで、多文化共生社会への理解や気づきを促進するという波及効果を狙った

取組による特定のニーズ に対する工夫

地域日本語教室で、ライフステージに応じた支援に当たる方々を対象として実施した人材育成講座の発表(パネル展示)と人材育成講座の受講者がコン

テスタントとして参加するスピーチコンテストの実施によって、ライフステ
一ジに応じた支援で必要となる支援者の姿勢(=言語教育観の3つの柱)に
ついて考える機会を提供した。さらにコンテスタントにインタビューをする
 ことで、学ぶ側の気持ちを来場者に共有することができた。

実施期間	令和6年2月12日	時間数	1 🗇	2 時間	×	1 回	=	2 時間
対象者	「はままつグローバルファ」 ア」来場者	フェ 参加者	総数	5 0人				

(1) 特徴的な活動風景(2~3回分)

取組事例①

【令和6年2月12日】【日本語教育に関わる人材の養成・研修】のパネル展示

浜松市の国際交流イベント「はままつグローバルフェア」内で実施した「フィリピノ語スピーチコンテスト」会場内の一部を利用し、取組4の日本語教育に関わる人材の養成・研修のパネル展示を行った。展示パネルの構成は、「(第一期) 学習者の意欲を見つめ直してみよう 報告」、「(第二期) 学習者の意欲を見つめ直してみよう 実践編 報告」、「BAYANIHAN~みんなで地域をつくっていこう~ 教室紹介」、「当法人のその他の活動紹介」である。来場者には当法人のスタッフが写真のように寄り添い、活動を紹介した。





取組事例②

【令和6年2月12日】【フィリピノ語スピーチコンテスト】開催

- ●周知を図るべく、広報活動に力を入れた。下記の関係機関・団体等に協力をお願いした。
- ・フィリピノ語専攻課程のある大学との連携/静岡県立大学、大阪大学、東京外国語大学
- ・共催、後援としての連携(浜松市、(公財) 浜松国際交流協会 HICE、浜松市教育委員会
- ・各所へ広報の協力依頼/(一財)自治体国際化協会(市民国際プラザ)、近隣の国際交流協会、取組4の 受講者、スタッフのクチコミなど
- ●このコンテストに参加することが、コンテスタントにとって「ナラティブ」としての表現する場になった。このことは、キャリア教育的な視点においても有意義であった。ペアになった通訳士は、コンテスタントの発表を日本語で言い換える準備をすることで、二人三脚でコンテストに挑んだ。当日、一般聴衆は、スピーチの内容やスピーチ後のインタビューから引き出されたコンテスタントと通訳士の関係性を、ドキュメンタリーを見るかのように感じ取っていた。これにより、聴衆にとってもコンテストを通して認知が刺激され深い学びにつながった。
- ●ハイブリッド開催にしたことで、会場ほか市外、県外、国外からの視聴もあった。

- ●意思疎通を図りながら、「ことば」を覚えて使う過程について、この取組に関わったすべての人たちが何か しら考える機会になった。
- ●審査を待つ間に、参加者が「フィリピノ語講座」を受ける機会を提供することで、このコンテストの持つ 意義への理解を促進した。





(2) 目標の達成状況・成果(取組による特定のニーズの充足)

【日本語教育に関わる人材の養成・研修】のパネル展示

当日は多くの来場者に恵まれたおかげで、たくさんの方にパネルをご覧いただくことができた。日本人来場者の多くは、日本語教育に関わりを持たない方々であった。フィリピノ語スピーチコンテストというフィリピンを強く意識するイベントであったため、フィリピンに関心のある方に、パネルを通して、浜松市のフィリピン人や地域日本語教室の様子、そこに関わる人材の必要性、人材育成の取組について知ってもらうことができた。その中でも大きな成果の一つが、パネルを見てくれた公立高校1年生の日本人生徒がその後、当法人のボランティアを希望してくれたことである。実際に、その後、当法人の学習支援の教室にサポーターとして加わってくれた。本人からは、「こういった世界があることを知らなかった。何かで関わってみたいと思った。」との声をもらった。

【フィリピノ語スピーチコンテスト】開催

「言語を覚える難しさを体験しよう」という標語を掲げて実施した「フィリピノ語スピーチコンテスト」については、多くの方が参加できるように、本取組はハイブリッドにて開催した。コンテスタントは取組4の人材育成講座から募り、受講者3名がコンテスタントとなった。聴衆からは、「とてもよいイベントでした(50代日本人)」、「身近な言語だけど学んだことがなかったから、新鮮で良かった。(10代日本人)」「異文化を体験できて楽しかったです。スピーチコンテストの内容も興味深かったです。ありがとうございました。(20代日本人)」、「運営お疲れ様でした。画面越しではありましたが、会場の臨場感がよく伝わってきました。(50代日本人)」「It is good to see Japanese also learning the other language.(10代フィリピン人)」などの声が聞かれた。

(3) 今後の改善点について

【日本語教育に関わる人材の養成・研修】のパネル展示

人材育成講座の受講者からは、ワークショップ中の「地域日本語教室に関するキーワード」や「自分の関わっている地域日本語教室とのライフラインチャートの作成」などのワーク作業が大変好評だった。これは実際に地域日本語教室に支援者として関わっている人たちそれぞれが地域日本語教室に関わることで感じている「やりがい」を再認識することができるワーク作業であったことが理由と考えられる。地域日本語教室の人材の裾野を広げるためにも、日本語教育に関わりのない方々にも、地域日本語教室の面白さややりがいを伝えら

れるパネル展示を行っていきたい。

【フィリピノ語スピーチコンテスト】開催

ハイブリッドで開催したものの、対面で参加した方と比べて、オンラインで参加した方は、「視聴」することしかできず、スピーチコンテスト内で行った「フィリピノ語講座」などのアクティビティに参加することができなかった。今後は、オンラインでも参加できるようなアクティビティを実施したい。

任意の取組

【名称:バヤニハン人材育成講座】

取組の目標

【日本語教育に関わる人材の養成・研修】

- ・地域の実情に沿った課題解決ができる日本語教師を育成するため、「目標・課題の把握」に焦点を当てた人材育成講座を実施する。
- ・地域の実情で触れた多様な背景を持つ学習者は、日本語学習の必要性は感じているものの、明確な「目標・課題」を把握している者は非常に少ない。このことから、個々の学習者の「目標・課題」を把握できる人材を育成する。「目標・課題」の把握には、何が目標で、何が課題なのかを「見立てる力」が必要である。「見立てる力」を育成するため、人材育成講座では、座学で「顕在的・潜在的ニーズ、レディネス」、「動機、動機付け」を学び、ワークショップで「目標・課題を見立てる模擬体験」を実施する。
- ・また、ワークショップの中では、目標・課題が明確になった学習者に対して、学習の進め方や関係機関等との連携について検討する機会も設け、講座参加者が各々の現場を想定した活動を模擬体験する。学習者の目標・課題を把握し、解決策を提案することで「『自立した言語話者』の育成」に寄与する人材を育成する。

【フィリピノ語スピーチコンテスト】

- ・上記の「日本語教育に関わる人材の養成・研修」の受講者からコンテスタントを募り、参加する者が「言語を覚える難しさ」を体験し、「日本語教育の参照枠」の言語教育観のうちの一つ、「多様な言語使用を尊重する」という気づき、態度を養う。
- ・コンテスタントと指導者(コンテスタントを指導するバイリンガル人材)が、ともに共同作業の難しさを体験し、多文化共生社会実現への理解を促進する

内容

【日本語教育に関わる人材の養成・研修】

(第一期) 学習者の意欲を見つめ直してみよう 定員50名

① 行政と連携して行う地域日本語教育について考える

講師:松井由和(浜松市国際課課長)、松岡洋子(岩手大学教授)1.5時間

② フィリピン国内の日本語教育熱について

講師:町田隆一(ミンダナオ国際大学 日本語センター長)1.5時間

③ みんなで長く一緒に学びに向かうしかけをデザインする

講師:南浦涼介(広島大学准教授)1.5時間

(第二期) 学習者の意欲を見つめ直してみよう (実践編) 定員20名

ワークショップを4回実施。2時間×4回

講師:有田玲子(東京にほんごネット代表)

【フィリピノ語スピーチコンテストの練習】

(第三期)「生活者としての外国人」といっしょにスピーチコンテストに挑戦しよう 学習者体験を提供。バイリンガル人材と共にスピーチを作成し、練習を実施 参加者の希望により練習回数を調整。

取組による特定のニーズ に対する工夫

ライフステージに応じた支援を行う支援者にとって必要なキーワードとして「動機付け」を掲げ、それについて学べる人材育成講座を三部構成で実施した。第一期では、主にフィリピン人学習者の「内発的・外発的動機付け」を取り上げた。第二期では、実際に日本語教室の実施を想定して、学習者への動機付けが成功している例=「人が集まる・学習が続く」教室の状態について、フィリピノナガイサの事例を紹介しながら、ワークショップ形式で学び合った。第三期では、第一期と第二期で学んだ内容を踏まえて、自身が学習者となる機会を提供するため、スピーチコンテストの参加を呼びかけ、その練習を行った。学習者側になることで、言語教育で必要とされる「言語教育観の柱」を支援者側としてどのように捉えるべきかを考える機会を提供した。

実施期間	令和5年10月15日から	時間数	第一期
	令和6年2月10日まで		1回 1.5時間 × 3回 = 4.5時間
			第二期
			1回 2時間 × 4回 = 8時間
			第三期
			参加者の練習希望回数による。
対象者	日本語教育空白地域をはじ	参加者	総数 220人
	めとする支援者、日本語教		
	師		

(1) 特徴的な活動風景(2~3回分)

取組事例①

【第1回 令和5年9月15日】(第一期)学習者の意欲を見つめ直してみよう

テーマ:「行政と連携して行う地域日本語教育について考える」

登壇者:松井由和氏(浜松市国際課)松岡洋子氏(国際教育センター 教授)

内容:

前半:浜松市の日本語教育の取組紹介(松井氏)

後半:なぜ学ぶのか?―地域日本語教育・日本語教室の意味―(松岡氏)

浜松市に住む外国人の多くは主に家族の絆で定着している人々であり、日本語学習を目的とした来日ではない。しかしながら、日本に移住した外国人の人々の自己実現を支える中で、日本語学習の必要性が生じて くる。

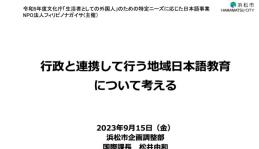
このような浜松市の状況を踏まえて、地域日本語教育における「動機付け」の必要性について、お二人の 立場からご教示いただいた。前半では、浜松市の取組として、学習者のライフステージに沿った様々なニー ズに対応していくためには、行政と NPO などの民間団体が両輪となって対応していける体制づくりを目指しているとのお話があった。後半では、岩手大学の松岡先生から、行政であれ民間であれ、必要なのは単なる「語学教育」なのではなく「生涯教育」なのだという覚悟が必要であるとのお話があった。お二人からは共通して、日本に移住した外国人の方々の自己実現(どういう人生を送りたいのか、何ができるようになりたいのか)を支えることが大事なのだというお話を伺うことができた。ライフステージに応じた支援を行う際には、学習者の将来のビジョンをしっかり描くことが、「動機付け」に繋がっていくことがわかった。

①9月15日

「行政と連携して行う地域日本語教育について考える」 浜松市国際課、松岡洋子氏/国際教育センター 教授







取組事例②

【令和5年11月21日】(第二期)ワークショップ2回目

テーマ: 学習者の意欲を見つめなおしてみよう 実践編①

講 師:有田玲子(東京にほんごネットワーク 代表)

内 容:地域日本語教室のキーワード、キーワードの実践例

ワークショップ2回目では、地域の日本語教室で必要となる「自己実現」や「見立てる力」、「ファシリテーター」などのキーワードをフィリピノナガイサの取組事例から学んだ。このキーワード一覧は昨年度と今年度の人材育成講座で取り上げられた言葉である。これらのキーワードをどの程度、自分の言葉で説明できるかを体験するため、先ず始めに受講生がグループになって各グループ内で受講生同士説明し合った。その後、これらのキーワードが実際の地域日本語教室でどのように具現化されているのかをフィリピノナガイサの教室風景を撮影した動画やインタビュー動画を見ながら、皆で確認した。

確認後は、受講生が既に同じような取組を自分自身が所属する地域日本語教室で行なっているのではないか?と振り返る時間を設け、それらの取組がキーワードのどれに当たるのかを認知する活動を行なった。自身の取組の意義を認知することで、そのための仕掛けを意図的に作ることができる。活動を「見える化」(第一期 3回目 「みんなで長く一緒に学びに向かうしかけをデザインする」で学んだこと)するためには、自身が日頃の教室での取組の意義を認識することが大切であることを学んだ。

受講生からのアンケートでは、

- ・学習者の意欲を引き出す、支援者の意欲を引き出す方法が、見つかって来たという思いがあります。ぜ ひ、最終回までに、皆さんで共有したいと思いました。
- ・子どもに学習を続けてもらう方法はエバさんのやり方が参考になりました。厳しく教えるのではなく、1人1人に声をかけ来てもらうようにする。先生や友達に会うために来るようにする。子どもに寄り添って、興味をもつことをきっかけとする。無理しない。とにかく来てもらう。大人に学習を続けてもらう方法はまず学習者のニーズを聞き、そのニーズに添った学習内容にする。ニーズが合わない場合は、他の教室を紹介することも必要。





(2)目標の達成状況・成果(取組による特定のニーズの充足)

【日本語教育に関わる人材の養成・研修】

第一期の人材育成講座の申込者は56名となり、想定していた50名の定員を超えた。第一期と第二期の延べ参加人数も217名となり大きな参加人数となった。この理由は、今年度の人材育成のテーマ「動機付け」が地域日本語教育に関わる方々のニーズに刺さったためだと考えられる。実際に受講者の声として、「教室に参加者が集まらない」、「学習者が途中から来なくなってしまう」などの悩みの声が多く届いた。このような悩みを抱える参加者に対して、「生活者としての外国人」の立場から、どのような日本語教室が地域で求められているのかを学び、話し合える人材育成講座・ワークショップを行えたことは大きな成果である。実際に、下記のアンケートでは、参考になったとの声が多く寄せられた。また、昨年度からの受講者のリピート率が高いことも本取組の成果である。

参加者のアンケートから一部抜粋

- ・浜松市における日本語教育環境の充実ぶりを知り、感銘を受けた。日本語教室が浜松市主催のものと NPO 主催のものが共存していることで、学ぶ側に幅広い選択肢を与え、また教室同士も交流して深め合えるので理想的だと思った。
- ・両輪ですすめるという事が非常に印象に残り、納得しました。テーマと課題等、話が非常にまとまっていて わかりやすかったです。ありがとうございました。
- ・お二人のスピーカーのプレゼンで、行政主導で行う社会参加のための第二言語としての日本語教育とゲスト側、ホスト側が相互に学習し共生社会創造のための活動を行う「地域日本語教育 (活動)」とが必要だということが語られ、我が意を得たりでした。
- ・浜松市が非常にしっかりとした方針、施策、制度を作って実施しているのに非常に感心しました。さすがだなと思いました。私の住んでいる外国人数も比較的少ない地方の自治体ではなかなか浜松のようにはいきませんが、グッドプラクティスとして参考になると思いました。

【フィリピノ語スピーチコンテストの練習】

(第三期) 「生活者としての外国人」といっしょにスピーチコンテストに挑戦しようの成果については、取組 3の【フィリピノ語スピーチコンテスト】開催にて記載。

(3) 今後の改善点について

本取組に関するアンケートで反響が多かったものとして、第一期3回目の「みんなで長く一緒に学びに向かうしかけをデザインする(講師:南浦涼介氏)」の講座で取り上げた、活動の「見える化」についてである。ある小学校で、日本語教室の取組を外部に見えるようにしたことにより、日本語教室を取り巻く環境(学習者、支援者、彼らの周りの人々、地域社会)に変化が生じ、学習者のエンパワーメントを促進するポジティブな流れが生まれた事例の紹介であった。受講生の所属する地域の日本語教室でも参考としやすい内容であり、

それらについてもっと深く学びたいとの声が多かった。今後の人材育成ではこのような受講生からの声をより 講座内容に反映させていきたい。

任意の取組						
【名称:バヤニハンワンストップ相談&情報提供】						
取組の目標		・相談の件数と分類程度に内容を記録し、守秘義務を遵守した上で本事業の報				
		告に上げる				
		・報告と内容記録を踏まえて次年度以降、行政をはじめとする関係機関と連携				
		する上で参考にする				
		・本取組から日泊	本語学習へ橋渡しした	たり連携した件数を本事業の報告に上げる		
内容		ワンストップ相談	談と情報提供を取組 2	2 「バヤニハン日本語教室(中区クラ		
		ス)」と同日、	同会場で実施。ワンス	ストップ相談については、教室実施の前後		
		1時間に実施し	<i>t</i> =。			
		【パヤニハンワ	ンストップ相談】			
		・相談内容を整理し、必要に応じて関係機関に橋渡しを行った。さらに、日本				
		語学習によって解決できる相談については、相談者に日本語学習の提案を行				
		い、学習への動機付けを行った。				
		【情報提供】				
		・情報提供では、取組2中区クラスの初回参加時に実施するインテーク面談並				
		びに学習アンケートの調査結果と相談者の相談内容を参考に、相談者にとって				
		必要となる地域の情報が何であるかを吟味した上で、実施した。				
取組による特						
に対する工夫 	•	ことと地域の生活で役にたつ情報の提供を実施した。相談内容によっては、関				
		係機関への橋渡しを実施。生活者としての外国人の困りごとの中には、日本語				
		がわからないから困っているものも多く存在するため、「相談対応→日本語学				
cb+4: 4088	△和 5 左 5 1		わせて実施した。 味即数	① □ \ . ¬ ¬ +□ = ½		
		月30日から 時間数		① ワンストップ相談 1回 1時間 × 56回 = 56時間		
令和6年3		729030		1回 1時間 × 56回 = 56時間 取組2の授業前後1時間に実施		
				XM 2075		
				2 時間 × 8回 = 16時間		
対象者フィリピン		<u></u> をはじめとする 参加者		延べ総数 181人		
-3 201 H		しての外国人」	2 // H	①ワンストップ相談 36人		
				②情報提供 145人(実人数 62人)		
				C		

(1) 特徴的な活動風景(2~3回分)

取組事例①

【令和6年2月24日】情報提供

テーマ:福祉ってなんだろう

参加者:進路・就職に関心のある相談者

ゲスト: 社会福祉法人天竜厚生会 平田さん(社会福祉士)、木戸さん

内容:講話「ふくしってなんですか」多様性を知ることと心のバリアフリー/車椅子体験・高齢者疑似体験 今回の企画は「福祉人材の裾野を広げたい」という先方の社会福祉法人側からのアプローチから実現した。外国人の就業先として福祉現場は知られてはいるものの、固定的でネガティブなイメージを持っている人が多い事は否めない。日本人外国人問わず福祉の世界を広く知ってもらい、その重要性と魅力を伝えるには、継続的にこういった取組を続けることが必要である。福祉業界の多様な職種を見学したり働く人たちから話を聞いたりする活動などがあれば、若い参加者の多い当法人にとっては生活者のキャリアを考えるうえでも大変有益だと思われる。

実施後のアンケートでは、「障害者や高齢者がどのように不便を感じているか分かった」、「感じ方や視点はそれぞれ違うけど、相手を理解しようとすることが大事だと思った」という声が多く聞かれた。福祉は障害者や高齢者だけでなくみんなを助けるものだ、というユニバーサルデザインの概念は参加者にとって新鮮だったようで、アンケートでそのことに触れている回答も多かった。車椅子や高齢者疑似体験セットをたくさん用意していただいたおかげで、参加者が全員リアルな体験を通して様々なことを考えた様子がうかがえた







取組事例②

【令和5年9月9日】

2019年に当法人の教室に通っていた学習者が進路の相談に訪れた(写真左)。2019年に来日後、日本での高校進学を検討したが、フィリピンでの進学を決意し、フィリピンへ一時帰国。フィリピンで高校を卒業してから、2023年に再来日し、現在は日本で空港のグランドスタッフの専門学校に通いたいとの相談であった。浜松市近郊で希望する内容を学べる専門学校を一緒に探し、入学に必要な資格や費用などを説明した。その中で、入学するためには、最低でも日本語能力試験N2が必要であることがわかり、今後の日本語学習の進め方について一緒に考えていくことを話し合った。その後(写真右)、土曜日の教室に参加し、支援者とともに専門学校に入るための道筋について考えた。日本語の学習の目標設定や費用の工面の仕方なども含めて話し合い、入学までのプランを設計した。その上で、日本語を学べる場所や自律学習の仕方についても教授した。





(2) 目標の達成状況・成果(取組による特定のニーズの充足)

【バヤニハンワンストップ相談】

- ・年間を通して、相談できる場を設置したことで、多くの相談が集まった。そのうち、何度も顔を合わせて対応する必要のある相談は36件に上る(別紙「取組5相談対応の報告」に記載)。
- ・生活者としての外国人からの相談の多くは、日本社会と接点が生じた際に起こるものであった。その中には、日本語がわかれば相談者本人でも対応できるものも存在するため、日本語学習に繋げる提案を行うことができた。
- ・相談の中で一番多いものは「進路」についての相談である。保護者が子供の進路のことを思って相談に来るケースが多かったが、本人から進路について相談を持ちかけられることもあった。特にこれまではあまり聞かれなかった、高等学校以降の進路相談は増加傾向にある。教育委員会などの関係機関に繋いだり、日本語学習の提案をすることに繋げたりすることができた。

【情報提供】

- ・取組2中区クラスの初回参加時に実施するインテーク面談並びに学習アンケートの調査結果によって、情報 提供の内容を吟味し、全8回実施することができた。情報提供と中区クラスを同日・同会場実施としたこと で、情報提供で得た知識をトピックにして、中区クラスのグループ学習に活かす試みも実施することができ た。このように情報提供で得た知識を「レアリア・生教材」と捉えた学習により、地域の文化、人、物、こと ばへの興味をより一層引き出すことができ、学習の動機付けにも繋がった。
- ・福祉について取り上げた回では、実際に車椅子に乗ったり、高齢者擬似セットを装着したりして、「体験」できる機会を提供した。体験後のアンケートでは、学習者からのコメントがいつも以上に多く、体験を通じて、学習者に多くの刺激を与えられることがわかった。

(3) 今後の改善点について

【バヤニハンワンストップ相談】

相談内容に偏りは見られるものの、相談内容の幅は広がっている。定住歴が長く、家族で滞在している生活者としての外国人からの相談は日本人が直面する悩み事と同じものである。出生から死亡まで相談できる場所が必要とされており、こういった声を各関係機関に伝えていく。

【情報提供】

情報提供で実施した体験活動が学習者に大変好評だったため、今後は、「体験」できる活動を増やしていきたい。さらに、「情報提供」、「体験活動」、「グループワーク」を組み合わせた形で、地域での生活に必要となる情報提供に日本語学習の要素がしっかりと組み込まれるような授業スタイルを検討していきたい。

4. 事業に対する評価について

(1) 事業の目的・目標

定住フィリピン人をはじめとする「生活者としての外国人」がコミュニティ内に埋没するのを防ぐこと

- ・様々な背景を持つ「生活者としての外国人」の、「広い窓口」として機能すること
- ・先の移住者が、後から来日した移住者の先行モデルとなり支援すること
- ・多文化共生社会実現への理解、継承のため、若年層を取組の補助者として積極的に取り込むこと
- ・多文化共生社会実現への理解、普及のため、地域日本語教育人材の育成に励むこと
- ・行政・教育機関をはじめとする日本社会と接点を持ち、「生活者としての外国人」を日本語教育に関連づけること

(2) 特定のニーズの充足に向けて試行した方法

定住フィリピン人をはじめとする「生活者としての外国人」がコミュニティ内に埋没することを防ぐためには、彼らが参加・利用しやすく、ライフステージに応じた支援の機能を持つ日本語教室が必要であると考えた。以下、この目的に向けて試行した方法である。

① 生活者としての外国人が日本社会と繋がるための「窓口」としての機能をバヤニハン日本語教室が担えるよう、下記の取組を試行し「生活者としての外国人や地域の人々が集まる教室づくり」を目指した。

・取組の「見える化」を実施

地域のたくさんの人々に本事業の取組を知ってもらうため、今年度から当法人の会員や関係者以外にも日頃のバヤニハン教室の風景がわかるよう SNS を利用して情報発信を行なった。またホームページの構成も変更し、ホームページを開けば直ぐに日々の教室活動が目に入ってくるように変更した。掲載する情報では、学ぶことを楽しんでいる様子が伝わる写真や文章を心掛けた。このように、本事業の取組を「見える化」したことで、生活者としての外国人に「教室に通ってみたい!」と思ってもらえることを期待した。また、一般の人々にも取組を知ってもらう機会が増えたことで、日本語教室に関心を持ってもらい見学希望者や繋がることを希望する声が増えることも期待した。

・ロールモデルの登用

学習者にとってロールモデルとなる「先の移住者」や「フィリピノナガイサの教室で育った第二世代(高校生や大学生)」を取組の補助者や支援者に据えた。教室で学んでいた側だった彼らが、教室で新たな学習者を支える側として活躍している姿を見せることで、学習者の動機付けに繋がり、教室への参加が増えることや日本語学習の促進の効果を期待した。

・地域の人々の受け入れ

地域の大学生のインターンや地域の人々(ボランティア養成講座修了者や日本語教員養成コース修了者含む)等の人材を積極的にサポーターやボランティアとして受け入れた。これらの人々にも地域日本語教室に関わる「窓口」を提供し、地域日本語教室に携わる人々の裾野を広げられることを目指した。

・地域の企業とのコラボレーション企画の実施

取組 2「バヤニハン中区教室」や取組 5「情報提供」の中で、地域の企業との連携を図った取組を実施した。「ハウスメーカー」、「社会福祉法人」、「浜松市」、「地域の商店街」に協力してもらった。

・相談機能の設置

取組2「バヤニハン日本語教室 中区クラス」と同日・同会場で取組5「ワンストップ相談」を設置し、生活者としての外国人が気軽に相談できる場を提供した。日本語学習によって解決できる相談には、日本語学習の提案を実施した。

② ライフステージに応じた支援や日本語学習をサポートするため、以下の方法で学習者のライフステージやレディネス、ニーズ、学習の進捗状況の把握に努めた。

・面談の実施

取組2「バヤニハン日本語教室」では、初回の教室参加時にインテーク面談と学習者アンケートを実施した。面談には学校関係者や日本語教師、キャリアコンサルタント、通訳士が対応できる体制を整えた。学習者の日本語学習の目的を中心に、現在の生活(家族・仕事)について聞き取りを行った。また、学習者アンケートでは、これまでのバックグラウンドを把握するため、学歴や職歴を記入してもらった。

オンラインでの面談

教室の参加が止まってしまった学習者に対して、オンラインにて面談を実施した。近況やその後の日本語学習の様子などを確認した。

・情報提供でのアンケートの実施

取組5で実施した「情報提供」では、学習者のライフステージを意識した取組を実施した。例として、「福祉ってなんだろう」の情報提供回のアンケートでは、進路・就職に関心のある学習者からは、福祉の仕事のイメージを持ってもらう良い機会となったことがわかった。一方で、他の参加者からは、福祉を利用するイメージを持つ機会になったことがわかった。

(3) 目標の達成状況・成果(取組による特定のニーズの充足)

事業の目的・目標に対して、以下の成果を挙げることができた

① 新たに来日した「生活者としての外国人」に対して「窓口」を提供することができた。

今年度は特に来日した直後の学習者の参加が多く見られた。事業の中で「生活者としての外国人」を対象にした取組 2 と取組 5 の実参加者数は合計で 173 人(実人数で取組 2 は 75 人、取組 5 は 98 人)であった。一方で、本事業期間(23 年 6 月~24 年 3 月)の浜松市のフィリピン人数の増加数が 249 人である。このことから、新たに来日した生活者としての外国人の多くがフィリピノナガイサの教室や相談を利用してくれたことがわかる。「生活者としての外国人や地域の人々が集まる教室づくり」が成果を上げたことがわかる。

② 目標に掲げた「本事業の参加者の2割を日本社会に繋げる」ことを達成できた。

取組 2「バヤニハン日本語教室」と取組 5「ワンストップ相談」には、実人数で 111 人が参加した。その内、日本社会への橋渡しができた人数は、46 人である。これは、ライフステージに応じた支援や日本語学習をサポートするために、学習者のライフステージやレディネス、ニーズ、学習の進捗状況の把握に努めた成果である。橋渡し先は以下の通りである。

行政書士、弁護士、浜松日本語教室(運営:浜松国際交流協会)、浜松外国人学習支援センター内の日本語教室(運営:浜松国際交流協会)、浜松日本語学院、就学促進事業の教室(運営:浜松国際交流協会)、静岡県立 立夜間中学校、静岡県立高等学校

③ 取組4のアンケート評価

取組4の「バヤニハン人材育成講座」では、多文化共生社会実現への理解、普及のため、地域日本語教育人材の育成に励むことを目標に実施した。取組4で実施した最終回のアンケート評価は大変好評であった。以下、アンケートの一部を抜粋したものである。

- ・研修を通して見えたフィリピノナガイサさんの取組みで、参加者との距離感や、スタッフ雰囲気がとても心 地良く感じました。自分(たち)の目指す空間と少し似ているなと(勝手に)感じており、今後の参考(目 標)にさせていただきたくことが多くありました。
- ・地域日本語教室の取組みは多くの人が関わり、流動的で、正解があるものではないと感じています。今回のような研修を受けながら、学びながら、トライ&エラーの繰り返しなんだなと、改めて思います。焦らずやっていきたいです。貴重な機会をありがとうございました。
- ・全講座量質ともにとても素晴らしい内容でした。普段は仕事の片手間にオンライン研修を受けているので自席で研修を受けているのですが、この研修は集中して聞きたかったので、別室を予約して受けました。研修の参加者の皆さんもとても話しやすい方々ばかりで、毎回研修があっという間に終わる感じでした。もう少し話したいな、と思うこともしばしばでした。毎回有田先生がお話しされるとちょっとした工夫に「なるほど」と思うと共に、ちょっとしたことで学習者側の意欲は大きく変わるかもしれないな、と参考になりました。この講座のスタッフをはじめ内容、研修の進め方自体からも学習(参加)者側の意欲を保つには?という事につい

て学ぶことが多かったです。他の方たちにも勧めたいので、来年も研修があるといいなと思います。本当にありがとうございました。

(4)地域の関係者との連携による効果、成果等

取組2「バヤニハン日本語教室」を通じて、行政や大学、企業と特に連携を深めることができた。さらに、当法人に所属する、フィリピンにルーツを持つ高校生や大学生が住民の一人として、また社会貢献として本事業に関わる土壌ができつつある。これは、この事業を長い年月かけ、彼らの親世代から「生活者としての外国人」のための日本語教育事業で接点を持っていた成果だと考えられる。

さらに、このような私たちの「場」を見守るようなネットワークが日本社会の中にもできつつある。例えば 行政、大学、企業の方から、当法人にお声を掛けていただき、連携を求められる機会が以前にも増して増え た。とくに企業からは、企業が「消費者を育てる」「勤労観を育てる」という観点から、フィリピン人と繋が りを求めるというご相談であり、「外国人を使う」というような問い合わせは著しく減少した。いっぽう、当 法人側からこれらの機関に連携や相談の依頼をした場合においても、快く応じていただけることが多い。次年 度以降の事業の取組に活かしていきたい。

(5) 事業実施に当たっての周知・広報と、事業成果の地域への発信等について

以下の方法により、周知・広報、事業成果の発信を行なった。

- ・フィリピノナガイサが運営・管理しているSNSやホームページ
- ・近隣の市町の国際交流協会が運営・管理しているSNS
- ・(一財)自治体国際化協会・市民国際プラザが運営・管理しているSNS

学習者の募集、授業報告については、フィリピノナガイサが主催する Facebook が有効であった。毎週土曜日の活動直前・直後に教室の様子を上げていることから、金曜日夜、土曜日夕方にアクセスが集中している様子が管理画面から見受けられる。

人材育成講座については上記の他、昨年、本事業で作成したメーリングリストへの周知、報告などの発信を 行った。フィリピノナガイサのホームページに人材育成講座の詳細を報告することで、講座の内容の充実さな ども汲み取ってもらえるよう図った。

(6) 今回のプログラム実施を通して得られた知見やノウハウ

① 継続的な「聞き取り調査」と「フォローアップ」の必要性

バヤニハン日本語教室では、令和4年度から初回にインテーク面談や学習アンケートを実施している。これらの取組によって、学習者の日本語学習の継続・橋渡しに一定の成果を上げることができた。しかしながら、それでも取りこぼしてしまう学習者が存在する。今年度は、オンラインで近況確認を行うことや教室内で聞き取りをすることによって、学習のフォローアップに繋がったケースがあった。このことから、日本語教室に継続的な「聞き取り調査」と「フォローアップ」の機能が備わっていることで、さらに成果を向上させられるのではないかと考えた。来年度以降、「聞き取り調査」の精度を上げて、より効果的な「フォローアップ」に繋げていきたい。

② 若者のライフステージに応じた支援の流れ

16歳以降の若者のライフステージに応じた支援では、学習者自身で自らの進路を考えることが大きなテーマである。若者の学習者に対して行った支援の流れは以下である。

「進路相談」=「窓口」

未成年者の場合は、保護者を交えて行った。進路相談では、学習者の1年後の様子をイメージしながら、どのようになっていたいかを共有した。

・ 「居場所の提供」

来日直後の若者が自身の目標を設定できるよう、バヤニハン日本語教室に案内した。教室内では、進路に関する取組も実施した。

・「進路ガイダンスや三者面談」

希望者に対して、年間で複数回実施。就学や就職の案内を行った。就学なのか就職なのかが決まった時点で、関係機関に橋渡しを行う準備に取り掛かった。

・「橋渡し」=「出口」

「就学」希望者には、就学をサポートしてくれる教室を案内。「就職」希望者には、ハローワークの実施する「職業訓練」を案内した。

③ バヤニハン日本語教室が目指している「人が集まる・学習が続く」教室デザインの理論的背景

「自ら学ぶ意欲の測定とプロセスモデルの検討」2009 櫻井・大内・及川を参考にバヤニハン中区教室が現在行っていることを言語化した。論文では、「安心して学べる環境」が整えられている中で、「欲求・動機」を刺激する試みを実施し、その後、それを「学習行動」に繋げ、そして、その面白さや有能感を「認知・感情」に繋げることで、また、「欲求・動機」に繋げていける正のスパイラルになっているとの説明があった。

バヤニハン日本語教室は「人が集まる教室づくり」を目指していたが、それが「安心して学べる環境」づくりに繋がっていたことがわかった。そして、「欲求・動機」を刺激する方法として、「情報提供」の実施が効果を発揮していたことや学習者のニーズごとに複数のグループに分かれて、サポーターと共に学ぶことで「学習行動」や「認知・感情」を促進していたことがわかった。

(7) 改善点、今後の課題について

改善点:

上記の各取組の報告で記載した「改善点」について、次年度以降取り組んでいく。

今後の課題:

① 「地域社会の創出」を担う日本語教室を可視化できる指標が存在しないこと

地域日本語教室は「社会参加のための言語保障」として日本語を学ぶ機会を提供する役割と「地域社会の創出」として、新たな外国人生活者を地域社会に取り込むための居場所やハブを提供する役割を担っている。当 法人の本事業での取組は後者であると言える。

「社会参加のための言語保障」については、「日本語教育の推進に関する法律」が施行され、生活するために必要な日本語を学ぶという目的のもと、「日本語教育の参照枠」、「生活 Can do」などが整備されている。このように、目的達成のためにどのような活動が求められているかの指針が存在する。

一方で、「地域社会の創出」については、外国人が多く住む地域で地域日本語教室は大きな役割を担ってきているものの、現状では、その価値を可視化できる明確な指標がないため、これを担っている地域日本語教室の価値を見出しにくい。今後も地域日本語教室に「地域社会の創出」を期待するのであれば、明確な指針や指標が必要であると考える。

② 「キャリアデザイン」の「知識」の必要性

当法人は、本事業の目的を、「定住外国人がコミュニティ内に埋没することを防ぐこと」と設定している。これは新しい地域社会を作ること (=地域社会の創出) と直結しており、この目的のもと、事業を継続することの必要性を感じている。そして、この「地域社会の創出」を目的とした地域日本語教室をどのように作り上げ

ていくのか、を考えることが、地域日本語教育に求められている専門性であると考える。具体的には以下の3点の専門性が挙げられる。

- ・地域住民を取り込む方策
- ・地域社会を作る視点での企業との連携
- ・ソーシャルビジネスとして地域日本語教室をとらえる視点

地域社会創出という目的のもとにおいては、その地域社会創出をする人々(日本人市民も外国人市民も運営者も全て)への働きかけが求められる。よって、地域社会創出という目的のもと行われる地域日本語教室を担う人材の専門性には、関わる全ての人々(自身をも含む)のライフステージにも目を向け、コーディネートする力が求められると考える。どのような人材が地域日本語教育を介して、地域社会を創出するのかということを踏まえ、日本語教員養成・研修課程の各段階・各分野においては「キャリアデザイン」の単元を新たに取り入れていただくことを希望する。